

ため池管理マニュアル



令和 2 年 6 月

農林水産省 農村振興局 整備部 防災課

目 次

第1章 マニュアルの目的	1
1. 1 ため池の状態チェック	1
1. 2 マニュアルの活用方法	1
第2章 基本事項	2
2. 1 ため池の役割	2
2. 2 ため池の構造	3
2. 3 豪雨・地震によるため池の決壊メカニズム	5
第3章 日常管理	7
3. 1 管理のポイント	7
3. 2 堤体	8
3. 3 洪水吐	11
3. 4 取水施設	13
3. 5 安全施設	15
<コラム>地域一体となった管理	16
第4章 非常時の対応	17
4. 1 緊急体制の整備	17
4. 2 大雨・洪水時や地震時の対応ポイント	18
第5章 点検チェックシート	24
5. 1 はじめに	24
5. 2 ため池の基本情報	25
5. 3 各施設のチェックポイント	25
5. 4 ため池の点検記録送信様式	36

ポイント

- ・ 管理しているため池の状態を知ることが大切
- ・ ため池の特徴を把握し、マニュアルを活用し最善の状態に保つ

1.1 ため池の状態チェック

あなたが管理しているため池をチェックしてみましょう。

- ① 洪水吐に土のうや角落し（※板等を落とし込み、水をせき止めること）を設置していませんか？
- ② ため池や洪水吐に土砂やゴミが堆積していませんか？
- ③ 堤体上流法面や洪水吐流入部付近に流木、枯れ枝・竹、ゴミがありませんか？
- ④ 堤体や管理用道路が見えないほど草木や竹が茂っていませんか？
- ⑤ ため池の周辺が開発されたり、雨量が多くなって大雨時の水位が危険であると感じたりすることはありませんか？
- ⑥ 堤体の一部が沈下したり、せり出たりしていませんか？
- ⑦ 樋管まわりから漏水はありませんか？
- ⑧ 巻き上げハンドルやゲートはきちんと作動していますか？
- ⑨ ため池にどんな生物が生息しているか知っていますか？

①から③は災害につながる可能性があり、④のような状況を放置したり、⑤のような変化を把握したりしていないと、緊急時の対応に支障が生じます。⑥から⑧は老朽化のシグナルですが、④の状態であれば堤体の状態を把握することすらできません。⑨はため池の底干しをしているかどうか分かります。

このマニュアルには、このようなため池の管理に関するポイントがまとめてあります。

1.2 マニュアルの活用方法

ため池は先人たちが農業用水の確保に苦労した歴史の証です。その反面、誰が、いつ頃、どのようにして作ったか分かっているものが少なく、使い慣れた道具のように、日頃からため池の癖（特徴）をよく把握して、その状態を最善に保つ必要があります。

このマニュアルは、ため池の管理者に必要な基本的事項や重要なポイントをとりまとめたものです。

日常管理における管理や点検、非常時の対応の際にご活用ください。

ポイント

- ・ため池の役割、施設の構造を理解する
- ・ため池の決壊がどのように発生するのか正しく理解する

2.1 ため池の役割

ため池の水は、農業用水としてだけでなく、防火用水など地域用水としても活用されています。また、ため池は農業用水を貯留するだけでなく、豪雨時には雨水を一時的に溜める洪水調節や土砂流出の防止などの役割、ゲンゴロウなど様々な生物の生息場所としての機能もあります。さらに、地域の言い伝えや祭りなどの伝承文化の発祥となっているものもあります。

＜ため池の主な機能＞

- 農業用水の貯留 : 農業用水を貯め、必要に応じ補給
- 洪水調節 : 豪雨時に一時的に洪水を貯留
- 土砂流出防止 : 上流から流入する土砂や土石流を溜める
- 生態系の保全 : 水生植物、昆虫類等の生息場所
- 保健休養 : 地域の人々の憩いの場
- その他の機能 : 防火用水などへの活用

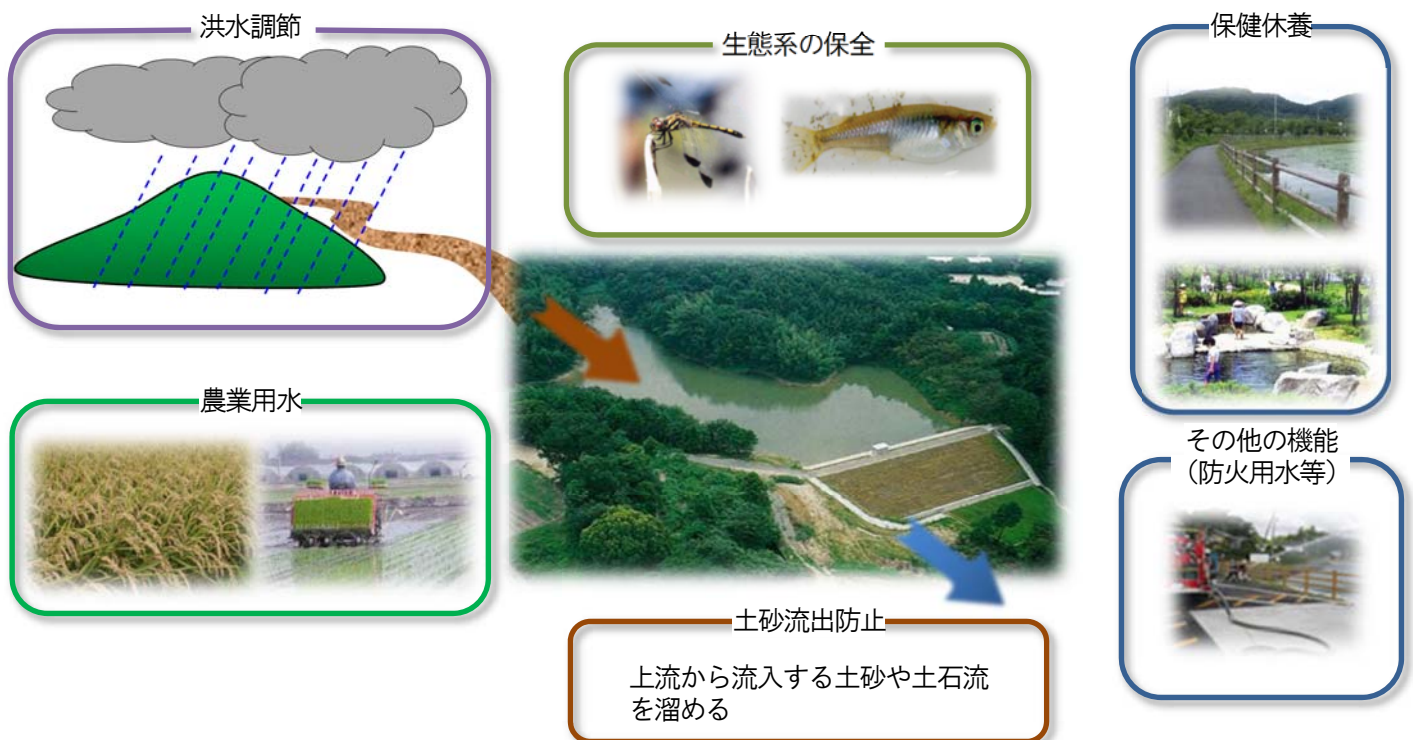


図1：ため池の主な機能

2.2 ため池の構造

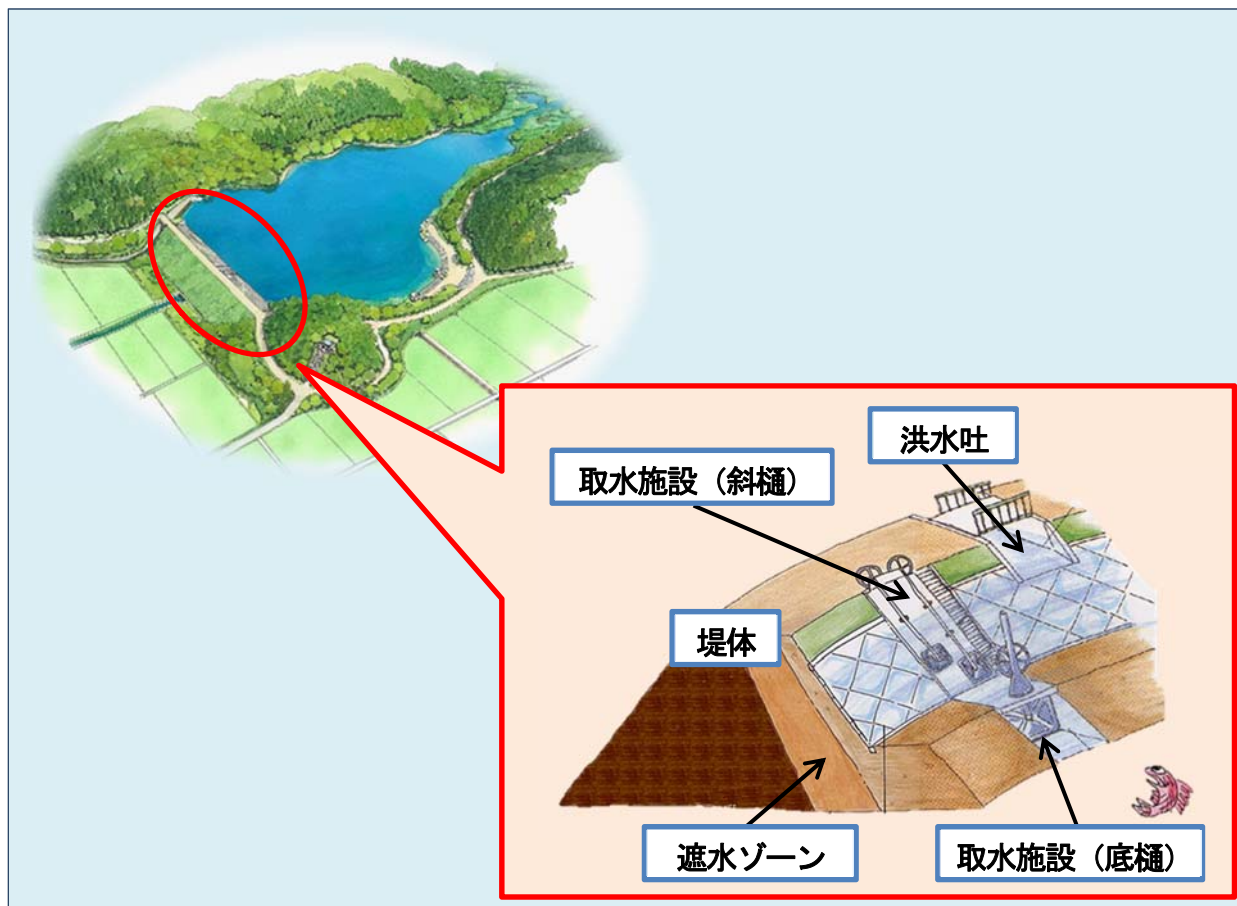


図2：ため池の施設

2.2.1 堤体

ため池の堤体は川や谷を横断し、土を盛り立てて造られる土木構造物です。堤体の上流から流れてくる水を堰き止め、堤体と堤体上流の地山で囲まれた空間（貯水池）に貯水するという最も重要な働きをします。そのため、通常は細粒分の多い土を突き固めて作られていることが多く、場合によっては水を通しにくい粘土分の多い土を突き固めた土の層（遮水ゾーン）を堤体の一部に入れているものもあります。

また、堤体法面に降った雨を排水するため、堤体下流の小段等に水路（承水路）が設けられている場合があります。

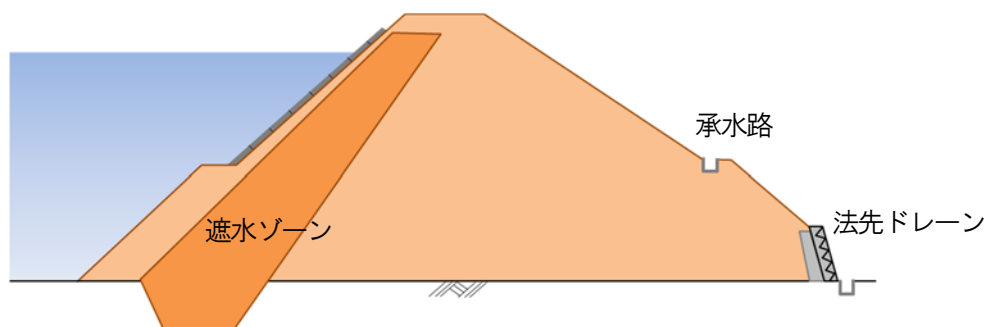


図3：ため池の断面図

2.2.2 洪水吐

大雨時に貯留水が堤体を越流しないように、貯水池に流入した水を安全に流下させるための施設です。



写真1：洪水吐
(香川県HPより)



写真2：洪水吐
(香川県HPより)

2.2.3 取水施設

ため池の水は、取水孔部から取り入れられ、斜樋及び底樋を通して用水路に送られます。

斜樋は通常何段かに分かれて取水ゲート又は栓が設置され、水位に応じて水面付近の温かい水を取水できる構造になっています。

底樋は斜樋から取り入れた用水の通り道であるとともに、ため池の底部にあって、ため池を空にするための排水施設としての役割も担っています。

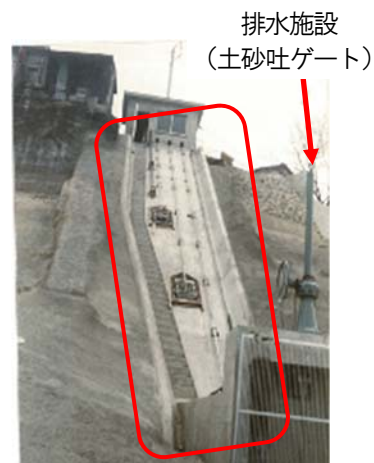


写真3：取水部（斜樋）

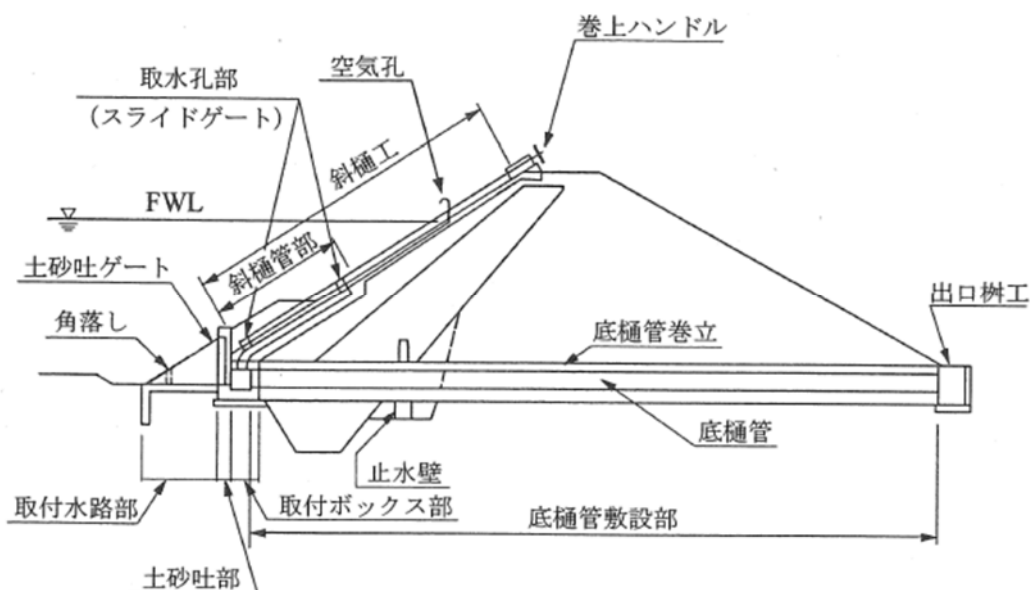


図4：取水施設の構造例

2.2.4 張石（張ブロック等）

ため池は山や谷から流れ出る水をせき止めやすい地形を選んで造られています。強い風が吹きやすいところでもあります。ため池の水面上に強い風が吹くと波浪が発生し、土を材料とする堤体が浸食されてしまうことから、これらを防ぐために張石（張ブロック等）を設置します。



写真4：張ブロック



写真5：張ブロック

2.3 豪雨・地震によるため池の決壊メカニズム

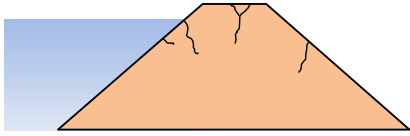
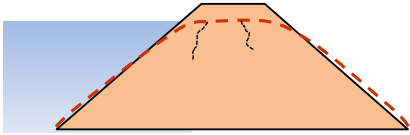
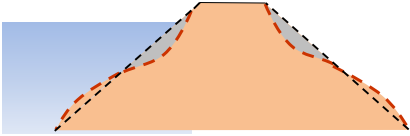
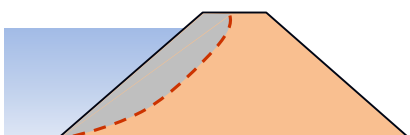
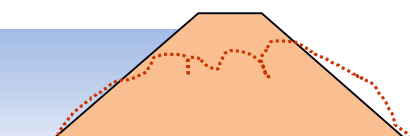
豪雨時に、大量の雨水がため池に流入し、貯留水が堤体を越流すると、越流水によって堤体が浸食され、非常に危険です。また、雨水が下流法面に大量にしみ込むと、下流法面が崩壊する場合があります。

地震時には揺れによって、土の強度が低下して、法面の崩壊や堤体の沈下により決壊することがあります。

＜豪雨によるため池の被災メカニズム＞

被災形態	被災メカニズム
＜越流破壊＞	豪雨や洪水吐の閉塞により、貯水位が急激に上昇し、堤体を越えて流れ出すと、下流法面を浸食することによって、破壊する場合がある。また、貯水位の上昇により、堤体内の水圧も上昇し、強度が低下して破壊する場合がある。
＜すべり破壊＞	貯留した水と降雨が堤体の中に浸透して、堤体内部の水分量が増加し、堤体の法面部の強度が低下することによって、法面部ですべりが発生し破壊する場合がある。
＜浸透破壊＞	堤体内部が劣化して、水を遮る機能が低下すると、貯水位が上昇した時に堤体の中の水圧も上昇して強度が低下し、破壊する場合がある。また堤体内に上流から下流まで貫通した水みちが発生し破壊する場合がある。
＜土石流による決壊＞	上流域の山林等の崩壊により発生した土石流等の流入により堤体が破壊される場合がある。

＜地震によるため池の被災メカニズム＞

被災形態	被災メカニズム
＜クラック＞ 	堤体の頂部などにクラック（亀裂）が発生する場合がある。堤体の上下流方向に生じるクラック（亀裂）は水みちとなることがあり、特に注意が必要である。
＜沈 下＞ 	堤体の形状をほぼ保ち、クラック（亀裂）などを伴いながら堤体が沈下する場合がある。多くは軟らかい地盤で発生している。
＜斜面崩壊＞ 	堤体法面の上部が沈下し、下部がはらんで変形が生じる場合がある。
＜斜面すべり＞ 	地震動により堤体の法面にすべりが発生する場合がある。
＜崩 壊＞ 	堤体や地盤が大きく変化し、崩壊する場合がある。決壊に至ることが多く、堤体や基礎地盤の液状化によるものと考えられる。

ポイント

- ・ 日常管理は、早期に施設の異常を発見し、決壊や自然災害を未然に防ぐ手段
- ・ 不慮の事故を防止するため、作業は単独で行わず、必ず2人以上で行う

3.1 管理のポイント**3.1.1 上流の山林及び開発の状況**

ため池の上流にある山林が伐採されたり、台風による倒木等が放置されたままとなったりしていると、ため池に流れ込む水量が一時的に集中したり、流入する流木やゴミが増加したりすることがあります。

これらは、洪水吐の排水能力を越えた水の流入や、ゴミによる閉塞を引き起こしかねず、堤体の崩壊に繋がる可能性があります。

また、宅地化等、周辺が開発されることにより、雨水がため池に流入する時間が早まり、降雨時におけるため池内の水位上昇がこれまでより早くなるおそれがあります。

このため、年に1回以上、ため池上流の山林など周辺の状況を見ておき、ため池の上流が開発されるなど気になる状況があれば市町村の担当者に相談しましょう。

3.1.2 堤体の草刈りと点検

堤体の草刈りにより、はらみだし（※法面がせり出していること）や漏水などの変状を見つけやすくなります。漏水はため池の水位が高いときに発見しやすいため、その時期を考慮して草刈りを行い、草刈り後は堤体の点検を行いましょう。

3.1.3 洪水吐の清掃

豪雨の際に、堤体から水が溢れると決壊する可能性があるため、洪水吐の土砂や流木はこまめに取り除きましょう。貯水量を増やすために土のうや角落し（※板等を落とし込み、水をせき止めること）等は絶対に設置してはいけません。

3.1.4 貯水と取水

ため池の貯水位を急上昇あるいは急降下させると、堤体を浸透する水が原因で堤体が壊れたり、法面が滑ったりすることがあります。長期にわたり落水させていた場合は、一気に満水まで貯めずに漏水等を確認しながら徐々に貯水するようにし、逆に水位を下げるときは、緊急放流の場合を除き、斜樋を上から順に開けていくなど、徐々に下げるようにしましょう。また、巻上げ機、ゲート、斜樋の蓋等は定期

的に潤滑油の注油や清掃等を行うとともに、施設の動作に異常を発見した場合には速やかに点検し、修理しましょう。

3.1.5 落水

洪水吐や斜樋、底樋、堤体上流側の張石等の点検のため、かんがい期の終了後に1回はため池の水を落としましょう。

3.2 堤体

👉 ポイント

- ・堤体の点検を定期的 to 実施し、法面の陥没、亀裂、はらみ等の変状や漏水を見落とさないように行う

〔解説〕ため池の決壊は、変状の進行や漏水量が増加した状態のところに、豪雨又は地震等により起こるのが一般的であり、堤体法面の変状や漏水を見落とさないことが重要です。

このため、堤体の点検は、満水の時期に少なくとも毎年1回（積雪地帯では、雪解け時期）実施しましょう。万一、変状を確認した場合は、直ちに市町村の担当者に相談し必要な対策を講じましょう。

また、変状については、毎回の点検時に変状箇所のスケッチや写真を堤体の平面図に記録しておく to 、その変状が進行性のものか判断することに役立ちます。

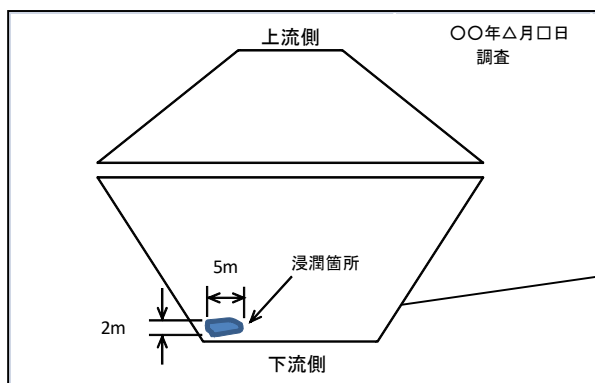


図5：変状箇所のスケッチ

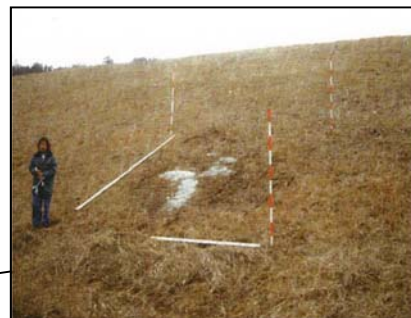


写真6：写真の例

特に漏水はため池の決壊につながるおそれがあるので以下のような状況に注意することが重要です。

- 土が混ざった濁っている水が漏れている（特に、危険な場合が多い。）。
- 漏水量が増えたり、漏水箇所が堤体下流法面の高い位置に変化したりしている。
- ため池堤体下流側に、水の漏れる穴がある。
- ため池に水がたまりにくくなっている。
- 豪雨時でも、洪水が洪水吐を越えない。
- 取水していないのに、底樋から水が漏れている。

漏水を確認した場合は、ペットボトルやメスシリンダーなどで漏水量を継続的に計測することが重要です。漏水量が以下の値を超えた場合には、市町村の担当者に相談しましょう。

＜漏水量の基準＞

堤体 100m 当たり 60 ℓ/分 （土地改良事業設計指針「ため池整備」）

ポイント

・堤体法面の立木を伐採し、草刈りを定期的に行う

〔解説〕堤体法面の立木は、漏水の原因になる場合があるため、伐採及び抜根を行いましょう。抜根した箇所は、堤体と同じような土で突き固めながら埋め戻します。

堤体の草刈りは、はらみだしや漏水などの堤体の変状を見つけやすくなることにつながります。年に1回以上は草刈りを行い、速やかに堤体の変状を確認しましょう。

刈った草が堤体を覆った状態だと堤体の表面の様子をよく確認できないだけでなく、イノシシなどの有害鳥獣を誘引し、堤体の破損にもつながるため、刈った草は取り除き、草刈り後は法面をよく踏みしめて下さい。

モグラやイノシシなどが掘った穴があれば、水が出ていないかどうか確認し、堤体と同じような土で突き固めながら埋めます。

ポイント

・堤体の下流側に設置されている承水路の清掃を定期的に行う

〔解説〕堤体を構成する土と土の間には細かい隙間があります。この細かい隙間に水が浸入し、締まっていない所などの弱い部分では水が集まりやすくなります。この結果、小さい土の粒子が少しずつ流れ出し、連続した大きな隙間（水

みち)ができます。

堤体の下流側に承水路が設置されているため池では、定期的に水路を清掃し、土が流れ出ていないか確認することが重要です。

承水路に流れ出た土の色が周りの土の色と異なっていたり、溜まる土の量が急に増えたりした場合は、直ちに市町村の担当者に相談しましょう。

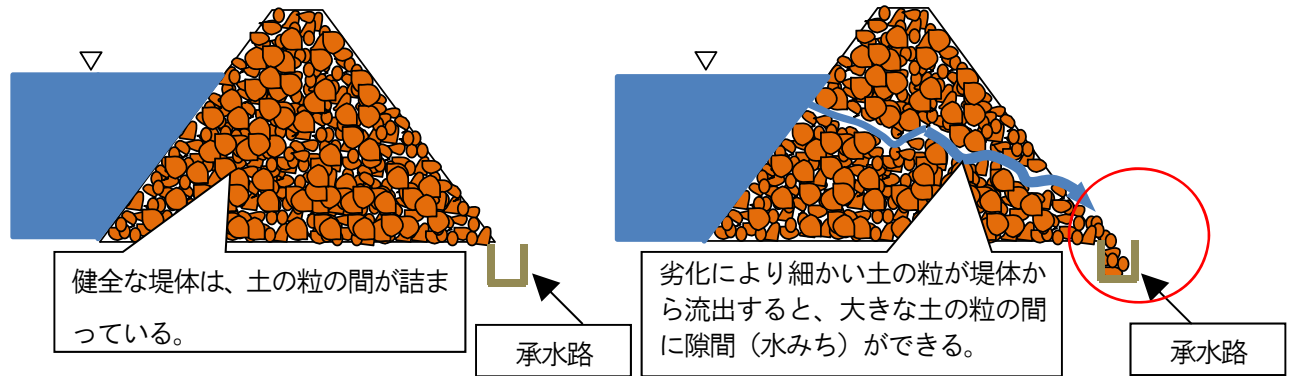


図6：土の細粒分が流出するイメージ

ポイント

- ・堤体の弱部となる可能性のある箇所を把握し、特に注意して点検する

〔解説〕土を盛り上げた堤体では、斜樋や底樋、地山との接合部が弱部（土が流されやすい）となります。また、堤体嵩上げや斜樋・底樋の改修履歴のあるため池では、新旧堤体の締め固め程度や材料土の違いにより、その境界部分が弱部となる可能性が高くなります。

このため、堤体の点検では、こうした箇所の点検を入念に行うことが重要です。また、過去の改修工事に関する資料（堤体、斜樋及び底樋の改修履歴）を確認しておくことも必要です。

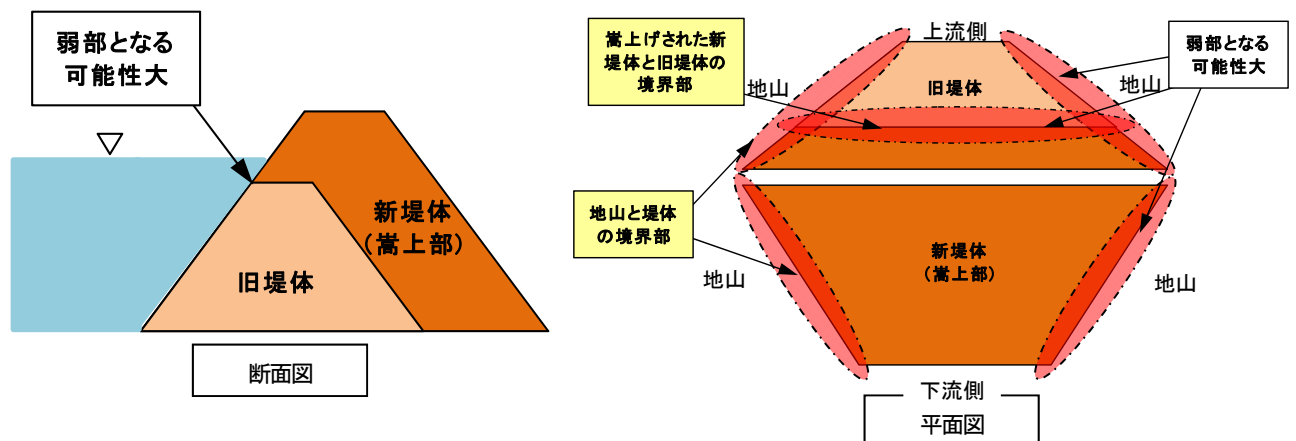


図7：堤体嵩上げした場合の劣化に対する弱部

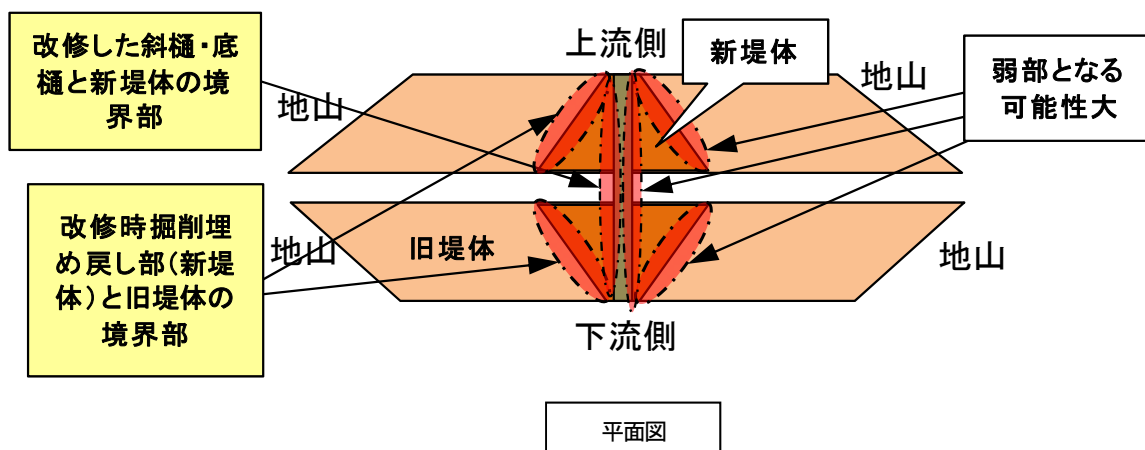


図8：斜樋・底樋を改修した場合の劣化に対する弱部

また、次の場合は、湧水対策（湧水を下流に流す水路の設置等）を検討しましょう。

○沢水や地山斜面からの水が、堤体を浸食している。

👉 ポイント

- ・法先ドレーン（積みブロック、石積みブロック等）の変状や漏水状況を確認する

〔解説〕法先ドレーンは堤体に浸透した降雨や貯留水を速やかに排水するもので、堤体内部に浸透した水位を低下させ堤体の安定性を保つために重要な施設です。堤体が不安定な状態となっている場合は、法先ドレーンに変状が見られる場合がありますので、よく確認する必要があります。また、法先ドレーンから出ている漏水に土砂が混ざっている場合や一部から多量の漏水が見られる場合は、堤体に異常が生じていることが考えられますので、直ちに市町村の担当者に相談しましょう。

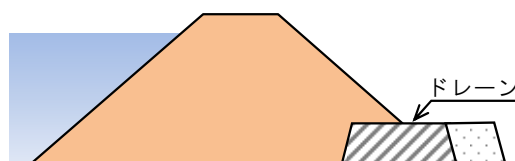


図9：法先ドレーン イメージ図

3.3 洪水吐

👉 ポイント

- ・洪水吐の越流断面内や越流堰から下流の水路内に障害物（流木やゴミ等）があれば速やかに清掃を行う

〔解説〕ため池の洪水吐は、大雨の際に堤体を守るため、上流で発生する洪水を安全に下流へ流すものです。このため、越流断面内に障害物があると、ため池が溢れ、決壊の原因にもなるため大変危険です。

このため、日常の管理においては、洪水吐の土砂や流木等の障害物をこまめに取り除くとともに、洪水吐流入部付近や堤体上流法面、さらに貯水面上にある流木、枯れ枝やゴミなども除去することが必要です。

また、洪水吐下流の水路がトンネル構造であったり水路上部に橋が存在したりする場合には、流木等で流水を阻害する可能性がありますので、障害物は速やかに撤去する必要があります。

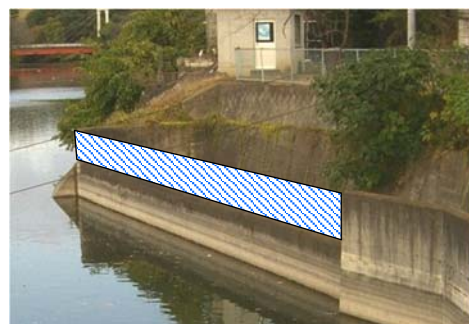


写真7：越流断面（青網掛け部分）



写真8：洪水吐下流水路の例

👉 ポイント

- ・ 洪水吐流入部の上に土のうを積んだり、角落しを設置したりしないようにする

〔解説〕 貯水池の貯水量を増やす目的で洪水吐流入部の上に土のうなどを積んだり、角落しを設置したりすることは、洪水吐の流下能力を著しく低下させます。洪水時にため池から溢れ出た水が堤体を越流した場合、決壊する危険があるので、絶対に行ってはいけません。



写真9：洪水吐流入部

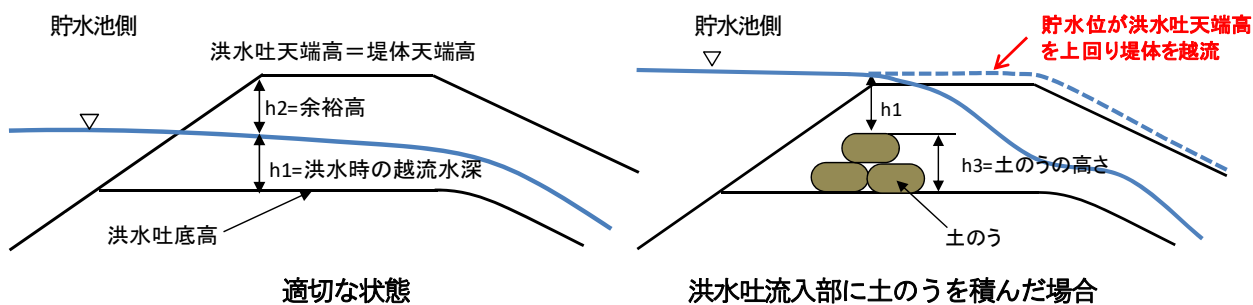


図 10：洪水時の水位の違いのイメージ

ポイント

- ・堤体上流法面の洪水吐周辺が浸食されていないか落水時に点検する

〔解説〕洪水吐と堤体あるいは地山の境界部は、土が洗われ、変状（劣化）の進行しやすい弱部となる可能性があります。落水時に堤体上流斜面の洪水吐周辺が浸食されていないかを点検することが重要です。

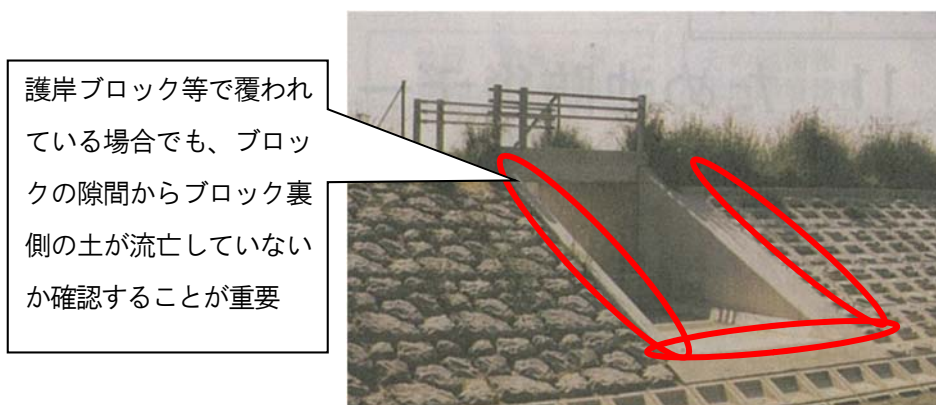


写真 10：洪水吐（貯水池側より）

次の場合は洪水吐の補修、改修等の対策を検討しましょう。

- 洪水吐が土で造られている。
- 洪水吐が小さすぎるため、雨が降るたびに溢れそうになる。
- 洪水吐下流水路から溢れた水が堤体を洗掘している。

3.4 取水施設

ポイント

- ・巻上げ機、ゲート、斜樋の蓋等は、定期的に潤滑油の注油や掃除等を行い、施設の作動に異常があった場合は速やかに点検、修理する

〔解説〕 巻上げ機、ゲート、斜樋の蓋等が正常に機能しないと取水に支障が生じるほか、洪水や地震などの緊急時にため池の水位を下げるができなくなる場合があります。

定期的に潤滑油の注油や掃除等を行うとともに、腐食の状態にも注意し、施設の動作に異常があった場合は速やかに点検、修理することが重要です。

👉 ポイント

- ・ 取水ゲートを全閉しているにもかかわらず底樋出口から泥で濁った水が出ている変状を見落とさないようにする

〔解説〕 取水施設の材料には石材やコンクリートなどが用いられており、性質の異なる材料の境界部が変状（劣化）の進行しやすい弱部となります。取水ゲートが全閉された状態でも底樋出口から泥で濁った水が出ているときは、底樋管が破損し、周辺部の土が流されている可能性があります。特に、地震後に斜樋全閉の状態の水が出始めたときは、底樋が割れている可能性があるため、直ちに市町村の担当者に相談しましょう。

日常の管理では、土で濁った水が出ているか確認することが重要です。

また、落水後の点検では、底樋内へ人が入れる場合は作業の安全を確保しつつ底樋内からの目視による点検を行うことも重要です。



底樋が破損し、堤体土が流出している可能性あり

写真 11：底樋出口（堤体下流）

👉 ポイント

- ・ 落水時に堤体上流法面の取水施設周辺が浸食されていないか点検する

〔解説〕 取水施設が堤体に設置されている場合、性質の異なる材料の境界部である取水施設周辺部が変状（劣化）の進行しやすい弱部となりますので、落水時に取水施設周辺が浸食されていないかを点検することが重要です。



コンクリートと堤体境界部が浸食

写真 12：取水施設

3.5 安全施設

ポイント

- ・日頃から万が一を想定して、管理しているため池に危険な点がないかどうかを常に確認しておく
- ・フェンス等の安全施設を日常的に確認し、破損している場合は速やかに補修する。また、危険と感じられる場合は安全施設を設置する

〔解説〕ため池周辺では、都市化や混住化が進んでいるところも多く、転落事故などの危険性が増しています。このため、安全柵、進入防止柵の破損など、事故につながる危険な箇所がないか日常的に点検、確認しておくことが必要です。破損している場合はロープなどで人が立ち入らないようにし、速やかに修理を行いましょう。

また、洪水吐付近や道路に面している堤体など、人が転落する危険がある箇所は安全柵や進入防止柵、進入防止看板等を設置しましょう。

なお、都道府県や市町村等が実施するため池管理者講習会への参加やため池に関する広報誌には目を通し、そこから得た情報を地域の関係者（水利組合や操作を委託している者など）に周知することも有効です。



写真 13：施設の破損

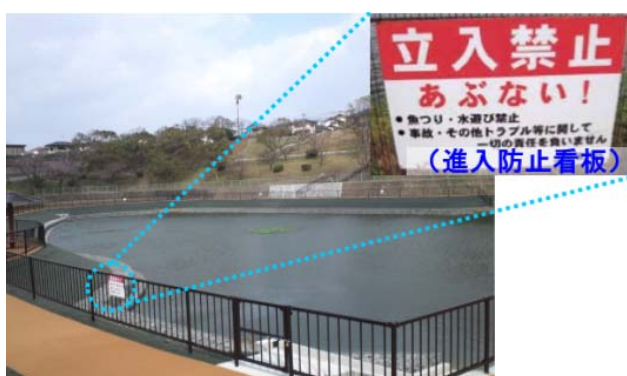


写真 14：安全柵の設置



写真 15：安全ネットの設置

＜その他安全施設設置の例＞

- ・ 浮き輪（ブイ）、浮きロープの設置
- ・ 転落者が脱出しやすい施設構造（階段護岸、足場ブロックなど）
- ・ 救命道具の常備

＜コラム＞地域一体となった管理

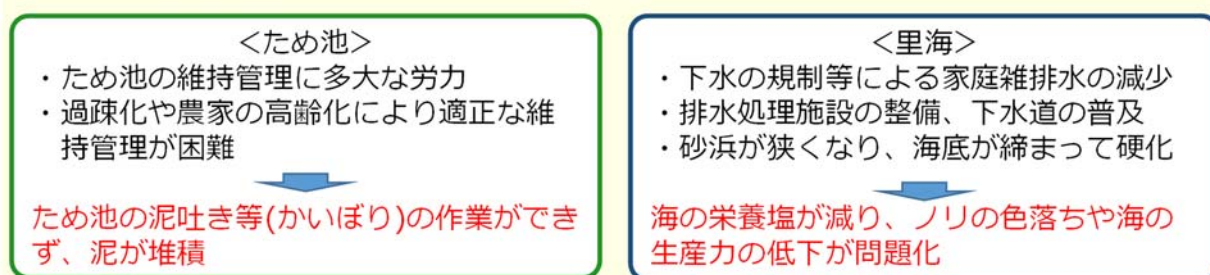
ため池の適切な保全管理により、災害の未然防止を図ることが重要です。このため、多面的機能支払交付金や中山間地域等直接支払制度を活用し、地域住民も参画した地域ぐるみの保全管理を実施することが有効です。

また、池干し（ため池の水を抜くこと）は池底に溜まった泥土を除去することによる水質改善効果に加え、堤体の浸食や底樋の老朽化状況など、普段目視できない箇所を点検することができ、適正な維持管理につながります。

【兵庫県の事例：農業者と漁業者の協働活動】

- ため池に溜まった山の栄養分（腐葉土）を海へ供給することにつながるため、農業者と漁業者の協働活動として「ため池のかいぼり活動」を継続的に実施しています。
- 泥土の除去に加え、農業者と漁業者等地域間の連携が図られることで、継続的な活動につながっています。

＜ため池・里海が抱える問題＞



＜問題解決に向けた方策＞

ため池の適正な維持管理（かいぼり活動）

農業者と漁業者の協働活動

＜協働交流＞

漁業者がため池に出向き、農業者と作業実施

＜情報交流＞

農業者と漁業者が情報交換

ため池に溜まった山の栄養分（腐葉土）を海へ供給



（ため池里海交流保全活動パンフレット（兵庫県）より引用）

第4章

非常時の対応

ポイント

- ・豪雨や地震等による災害に備えて、情報連絡体制を整備する
- ・現地で行動する際は、安全確保のため、必ず2人以上で行動する

4.1 緊急体制の整備

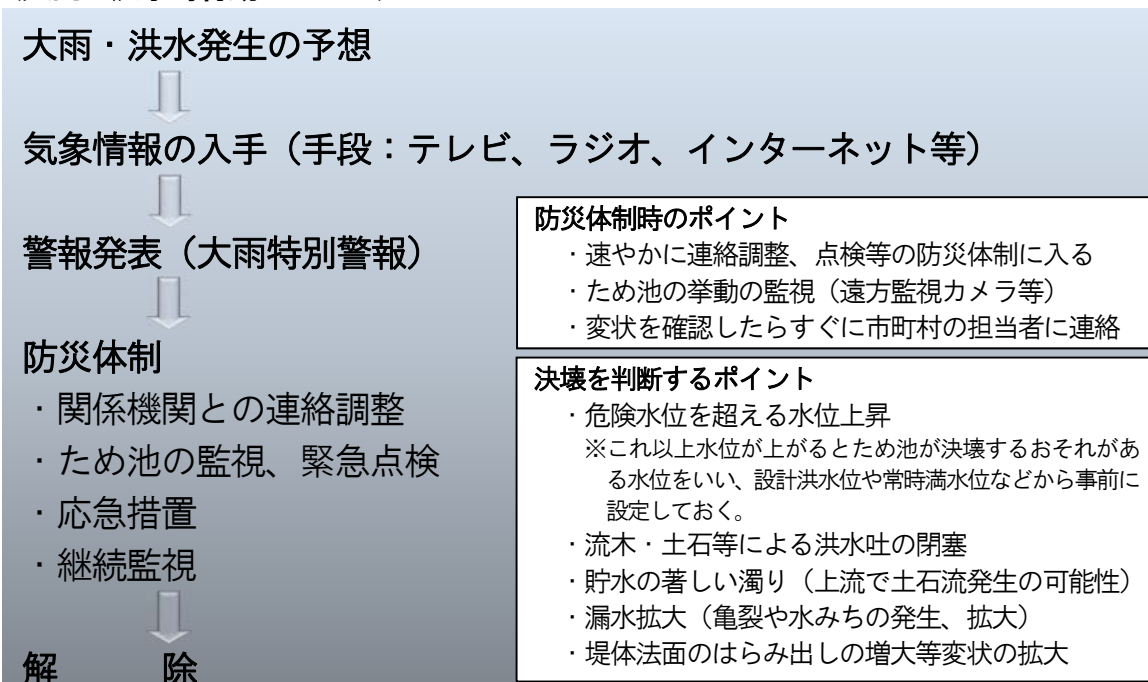
〔解説〕豪雨や地震等による災害の可能性が予測される場合は、ため池の防災の観点から、監視や緊急点検等の対応に加え、円滑に関係機関と連絡できる体制が必要です。このため、日ごろから非常時の人員や必要資材を確保するとともに、市町村の担当者（農林、災害）と相談し、緊急時の連絡先（電話番号、FAX番号、メールアドレス等）を整理しておくなどの体制を整えてください。

以下、防災体制と大雨・洪水時行動の例を示します。

（防災体制の例）

関係者	（ため池関係者） ため池管理者	（市町村） 担当課担当者	（都道府県） 担当課担当者	（地域） 関係集落 消防団等
役割	日常管理	相談・診断	指導・診断	
	非常時管理 ・監視 ・緊急点検	緊急体制	緊急体制	避難準備、 支援

（大雨・洪水時行動のフロー）



4.2 大雨・洪水時や地震時の対応ポイント

4.2.1 事前放流、低水位管理の実施

👉 ポイント

- ・ 降雨前に事前放流等により水位を下げておくことで、ため池の空き容量（流入する洪水を貯留する容量）を確保する
- ・ 空き容量の確保だけではなく、ため池の決壊を防止する効果も期待できる

〔解説〕 降雨予測等を基に、ため池の貯留水を事前に放流し水位を下げておくことで、雨水を一時的に貯留する容量が確保されることから、下流の浸水被害を軽減させることができ、併せてため池の決壊を防止する効果も期待できます。水を使わない時期に予め水位を下げておくことも同様の効果が得られます。

なお、長期間、低水位管理を継続していると、草の根が堤体深くまで伸びたり、動物が穴を開けたりして、堤体の遮水性が低下する可能性があります。豪雨の危険がない時期に、年に一度は満水位まで水位を上昇させるようにしましょう。

また、農業用水の利用に支障が出ないよう、事前放流量や水位を下げておく時期などについては、地域の水利実態や降雨量を踏まえながら、市町村の担当者や管理者、農家の方が事前に相談し決めておくことが必要です。

① 降雨前の事前放流による低水位管理

降雨予測等を基にため池の貯留水を事前に放流し、空き容量を確保する手法です。放流は以下の方法があります。

- （ア）事前放流施設の操作による放流（洪水吐スリット、放流のために設置されたため池栓、放流管等）
- （イ）取水施設の操作による放流

② 期別毎の低水位管理

降雨前に水位を下げておく即時的な管理ではなく、期別毎に水位を設定して管理する手法です。具体的な例としては以下の方法があります。

- （ア）非かんがい期は、常時完全落水する又は低水位による管理
- （イ）かんがい期は必要水量から期別の水位設定を行い、空き容量を確保

③ 留意事項

ため池の貯水位を急に上げたり下げたりすると、堤体への水の浸透によって壊れたり、法面がすべったりすることがあります。長期にわたり落水させていた場合は、一気に満水まで貯めずに漏水等を確認しながら徐々に貯水するようにし、水位を下げるときは、緊急放流の場合を除き、斜樋を上から順に開けていくなど、徐々に下げるようにしましょう。

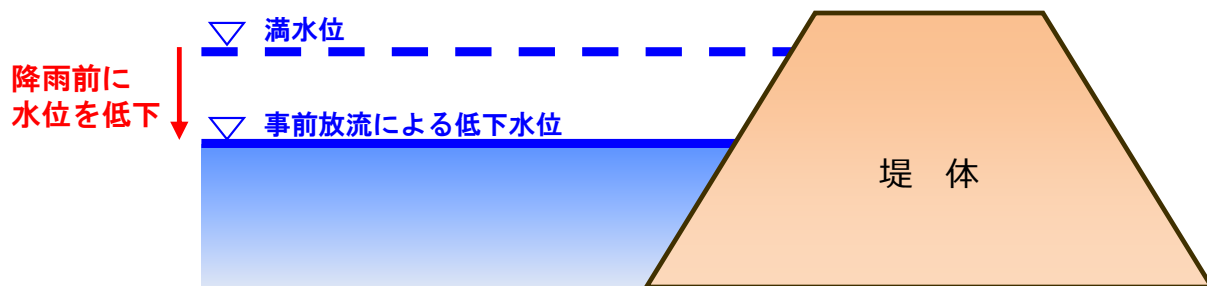


図 11：事前放流イメージ図

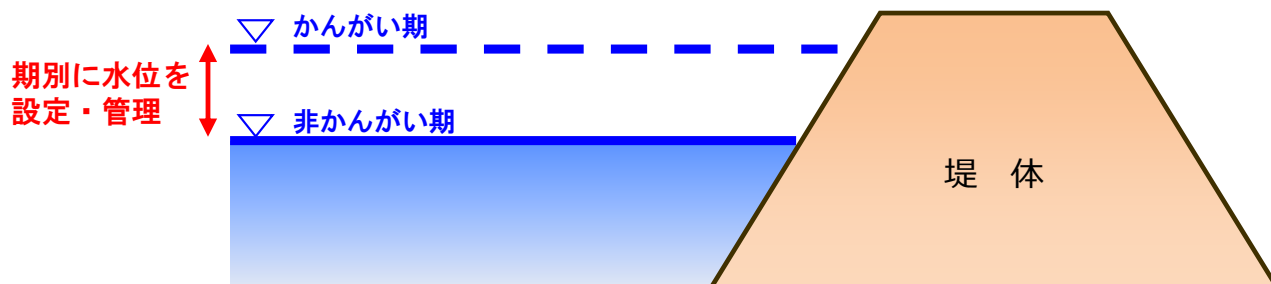


図 12：低水位管理イメージ図

※ため池の洪水調節機能強化対策の手引き（H30.5 農林水産省農村振興局防災課）

4.2.2 大雨・洪水時

👉 ポイント

- ・大雨や局地的豪雨が予想される場合は、十分に注意しながらため池の監視を行い、危険水位に達するおそれがある場合は、速やかに市町村の担当者や関係集落に連絡する

〔解説〕 天気予報により大雨や局地的豪雨が予想される場合は、関連情報に注意し、気象台の注意報・警報の発表に合わせて防災体制に入り、安全を第一にし、十分に身の安全に注意しながらため池の監視を行います。ため池の水位が危険水位に達することが予想される場合は、速やかに市町村の担当者や関係集落に連絡してください。

- ① 大雨・洪水や局地的な豪雨の時は、身の安全を確保しつつ、ため池で以下の作業を行います。なお、豪雨時に近づくのは危険と判断されるため池については、カメラや水位計等を設置し、遠方で監視することも安全確保の点からも有効です。
 - ・ 水位の上昇量を一定の時間おきに調査（予め15分毎などと決めておく。）。
 - ・ 流入水に注意。浮遊物に樹木が混ざったり、流入水が急激に濁ったりした場合は、流域に山崩れや土石流の発生のおそれがあるので水位上昇に注意。
 - ・ 洪水が溢れて堤体を越流していないかを確認。
 - ・ 流域の状況に注意。特に、山崩れの起こりやすい場所は要注意。
 - ・ その他急変の場合は、早急に市町村の担当者へ連絡。
- ② 水位が危険水位に達することが予想される場合、その他急変の場合は、速やかに市町村の担当者、関係集落、消防団等に急報するとともに、浸水が想定される区域の住民に避難の準備をさせてください。なお、気象情報や流入水の状況などから、危険水位以上に水位上昇し、決壊のおそれがあると判断された場合は、市町村の担当者へその旨を伝達して緊急放流などの応急対応を検討してください（市町村は避難勧告等を検討します。）。
- ③ 豪雨が止み、洪水の流入量が減少、又はため池の水位が低下した後も監視者は待機して観測を継続し、堤体などの安全が確認された後に体制を解除してください。

※危険水位とは、これ以上水位が上がるとため池が決壊するおそれがある水位をいい、設計洪水水位や常時満水位などから事前に設定しておく。

4.2.3 地震時（地震発生後）

ポイント

- ・ 震度4以上の地震があった場合は、十分に身の安全に注意しながらため池の点検を行い、点検結果を速やかに市町村の担当者や関係集落に連絡する

〔解説〕ため池の所在地で気象台における震度4以上の地震があった場合は、堤高15m以上の防災重点ため池に対して速やかに目視により外観を点検して、その結果を直ちに市町村の担当者へ連絡してください。異常が無い場合も、報告を行ってください。震度5弱以上の場合は、全ての防災重点ため池に対して同様に対応してください。

① 緊急点検（24時間以内、速やかに）

緊急点検を実施し、

- ・ 堤体全体（亀裂、崩壊、段差等）
- ・ 堤体や洪水吐（漏水、亀裂、崩壊、段差等）
- ・ 洪水吐の障害物
- ・ 周辺地山の段差、亀裂
- ・ 流域の地山の崩壊、地すべり等

について、確認を行ってください。

② 被害の発見

ため池の堤体に亀裂、漏水等の被害が確認された場合は、速やかに市町村の担当者、関係集落、消防団等に急報するとともに、浸水が想定される区域の住民に避難の準備をさせてください。なお、気象情報や流入水の状況などから危険水位以上に水位上昇し、決壊のおそれのあると判断された場合は、市町村の担当者へその旨を伝達して緊急放流などの応急対応を検討してください（市町村は避難勧告等を検討します。）。

③ 継続点検（1週間を目安）

比較的強い地震の場合は、発生直後に被害が認められなくても、一定期間を経過した後被害が発生することがあります。このため、1週間を目安に緊急点検と同様の目視による点検を行い、異常があれば、市町村の担当者へ連絡してください。

4.2.4 応急措置

👉 ポイント

- ・大雨・洪水時又は地震時における監視あるいは緊急点検により決壊が予想される場合は、下流域の安全確保のために管理者で可能な応急措置を行う

〔解説〕大雨・洪水時又は地震時におけるため池の監視あるいは緊急点検で、堤体の著しい変状等により決壊が予想される場合は、速やかに市町村の担当者へ連絡を入れるとともに、下流域の安全を確保するため、管理者は可能な応急措置を講じてください。

なお、応急措置を講じる場合には、十分な安全確保ができることを確認し、安全が確保できない場合にはため池には近づかないでください。

① 緊急放流

ため池の堤体に豪雨や地震によるすべり、亀裂、漏水等の異常が発生した場合、管理者は二次災害を防止するために緊急放流を行い、安全な水位まで下げてください。この時、水位急降下による堤体上流法面のすべりや下流水路が溢れるおそれがありますので、放流量に注意してください。

緊急放流を行う場合は、下流住民及び市町村の担当者等の関係機関と十分に連絡調整を行います。

② 応急対策

ため池堤体の法面にすべり、沈下、亀裂、陥没、崩れ、はらみだし、漏水等の変状が確認された場合は、市町村、関係集落や防災組織へ速やかに連絡します。

管理者は、市町村、消防団等と連携し、土のう、シート、むしろ、カマス、縄、杭等あらかじめ用意した応急資材を持ち現地に急行し、シートかけ、土のう積みなど被害拡大を防止するための応急対策を実施してください。なお、ため池が越水しそうな場合や堤体が崩れている場合は、堤体の下流側から近づくことは絶対に避けてください。

※水位低下に相当の日数がかかる場合や取水施設が破損している場合は、お近くの農政局や市町村等にご相談ください。農政局には貸し出しが可能な排水ポンプもあります。

4.2.5 ため池防災支援システムの活用

ポイント

- ・ため池防災支援システムにより、ため池の決壊危険度をリアルタイムに予測し、予測情報を関係者間で迅速に伝達・共有することが可能
- ・スマートフォンやタブレットなどの端末を用いて、ため池管理者が現地で被災状況や被災写真をアップロードすることで、関係者がため池決壊の有無や被災状況を即座に情報共有することが可能

〔解説〕ため池防災支援システムは、豪雨・地震時のため池決壊危険度を予測し、予測結果がシステム上で地図表示されます。また、スマートフォンやタブレットなどの端末を使用すれば、災害発生の通知や緊急点検時に現地で被災状況を入力したり、被災写真をアップロードしたりすることができ、被災状況を即座に情報共有されることから、これまでの調査票の入力を省力化することができます。

このように、本システムを活用して情報共有の迅速化、応急措置の早期着手により、被害の最小化を図ることが期待されます。

市町村の担当者は「ため池防災支援システム」のメインシステム、ため池管理者は「ため池管理アプリ」を使用してください。

なお、ため池管理アプリを使用する場合には手続きが必要です。市町村の担当者へ問い合わせてください。また、操作方法などについては、農研機構のホームページで確認してください。

ため池防災支援システム 農研機構

検索

【ため池管理アプリ（MEAP）イメージ】



図13：スマートフォン、タブレット等を用いた被害報告イメージ

ポイント

- ・ 日常点検作業で確認する具体的なポイントを整理
- ・ 点検前に基本情報の整理、改修履歴等を確認する

5.1 はじめに

このチェックシートは、ため池の日常点検作業の中で確認する際の具体的なポイントを整理したものです。

市町村の担当者等への報告には5.4の様式を使用ください。

点検の前に、ため池の基本情報を整理し、特に、過去に実施した改修資料を調査し、堤体、洪水吐及び取水施設の改修履歴を確認してください。改修箇所との境界は変状（劣化）に対する弱部となる可能性がありますので、改修箇所があれば、点検の際には改修箇所の境界部分に変状がないか注意深く点検してください。

点検は、目視を基本として行います。水中にある斜樋やゲートなどの目視確認が難しい構造物の場合は、ため池の落水時期に点検するなど可能な範囲で対応してください。

ここに示すような項目の変状が、新たに確認された場合には、市町村の担当者に相談してください。

また、このチェックシートに載っていないくても、安全上問題と思われる現象がみられた場合は市町村の担当者に相談してください。

実際の点検の際には、次ページ以降をコピーしてご利用ください。

○なお、変状が確認された箇所には、変状箇所の大きさの測定や写真撮影を行うなど、記録として残してください。次回以降も継続して点検を行い、経年や貯水の変動による状態変化を確認しましょう。

5.2 ため池の基本情報

作成年月日：(西暦) 年 月 日

施設名称							
施設管理者名							
施設所在地 (都道府県・市郡(町村)・地先)							
目的(該当記号に○)		A : かんがい、D : 防災、F : 治水、W : 上水道、I : 工業用水、 P : 発電、S : 消流雪、R : レクリエーション、O : その他					
施設諸元	堤体	堤高(m)		上流法面勾配		総貯水量(千m ³)	
		天端幅(m)		下流法面勾配		受益戸数	
		堤頂長(m)		集水面積(km ²)		受益面積(ha)	
	洪水吐	構造型式		取水 施設	構造型式		
		設計流量(m ³ /s)			設計取水量(m ³ /s)		
	底樋	直径φ(m)又は縦 ×横寸法(m)		常時満水位 水深(m)		堤体築堤完了年度 (西暦)	
		材質		設計洪水位 水深(m)			
	点検状況	点検の状況(該当するものに○印をつける)					
1. 管理者常駐(管理棟) / 2. 定期的に巡回(頻度) / 3. 不定期に巡回(1年に 回程度) / 4. その他							
堤体及び付 帯施設の改 修・補修歴	堤体及び付帯施設の改修・補修歴(新しい順に記載)						
	改修完了年(西暦)	改修箇所及び数量					
周辺の開発 状況	開発の有無	ため池への影響(貯水位の上昇速度が早まったなど) ※ 新しい順に記載					